

事例 No.5 日本語と教科の統合学習指導に関する授業研究会

福岡市教育委員会

主たる対象者	現職・日本語指導担当教員
目標	授業参観、講義、受講者間の議論を通して、「日本語と教科の統合学習」の授業における日本語の目標の立て方を理解し、設定できるようになる。また、授業実施時の支援の仕方とその効果について考え、授業に取り入れることができる。
研修内容	⑰日本語指導の理論と方法「日本語と教科の統合学習」他★⑭⑮
形態・方法	活動型 授業研究
時間	3時間

★本事業報告書(2017)「養成・研修内容構成」(pp.72-76)の項目

1. 現状と課題

(1) 外国人児童生徒等の状況

福岡市では、近年、在留外国人の増加、出身国の多様化が進んでいる。市内公立小中学校に在籍する外国人児童生徒数も増加傾向にある。福岡市の2018年5月1日現在の日本語指導が必要な児童生徒数は295人(小学校244人、中学校51人)である。

(2) 外国人児童生徒等の受入及び指導体制

日本語指導は、全体のコーディネートをを行う「日本語サポートセンター」、初期指導を行う「拠点校」、教科学習への橋渡しの役割を担う「日本語指導担当教員配置校」及び日本語指導を補助する「日本語指導員」が連携して行う。平成29年度より日本語指導を専門的に行う教員(日本語指導教諭)の採用が始まった。

「日本語サポートセンター」には専任の日本語指導コーディネーターがおり、受け入れ時の窓口となるとともに、学校・日本語指導担当者からの相談を受ける。「拠点校」は市内の小中学校各4校、「日本語指導担当教員配置校」は日本語指導が必要な児童生徒が多く在籍する市内12校である。日本語指導担当教員未配置校の児童生徒は、拠点校・配置校への通級、担当教員・指導員の巡回により日本語指導を受けることができる。

受け入れに当たっては、コーディネーターが児童生徒本人、保護者と面接を行い、児童生徒の日本語能力の判定や保護者からの聞き取りを行っている。各拠点校の日本語指

導担当教員、在籍校の管理職や担任等が同席し、情報を共有している。

(3) 福岡市の外国人児童生徒等教育担当者研修における課題

- ①日本語指導担当教員の「年少者日本語教育」「日本語と教科の統合学習」指導経験が限られていること（日本語指導教諭の多くは成人を対象とした日本語教育経験者）。
 - ②経験の浅い日本語指導員への研修機会が十分でないこと。
 - ③一般教員の外国人児童生徒等教育についての理解はいまだ十分とは言い難いこと。
- 本市では、「日本語指導担当教員」「一般の教員」「指導員」の課題が異なっており、個々のニーズに応じた研修が必要であると考えます。

2. カリキュラム（研修実施計画）

★本事業報告書（2017）の「養成・研修内容構成」（pp.72-76）の項目

研修名	第3回日本語指導担当教員研修会 福岡市JSL日本語指導教育研究会第6回研修会 共催 日本語と教科の統合学習指導に関する授業研究会			
受講者	・人数:29人 ・受講者の立場 日本語指導担当教員(小学校教諭、中学校教員)、大学教員、大学院生 ・年齢層:20代(0)名 30-40代(14)名 50代(11)名 60歳以上(4)名 ・その他:			
テーマ	日本語指導の実際(1) JSLカリキュラムによる指導の実際 ★⑰日本語指導の理論と方法 ⑱現場での実践(現場での教壇実習、参与観察等)に向けて、⑲自己の成長、環境づくり			
講師等	福岡市教育委員会指導主事 西村綾子氏			
目標	・日本語と教科の統合学習における「日本語の目標」の立て方を理解し、設定できるようになる。 ・効果的な支援の方法について考え、取り入れようとする。			
活動展開 (115分)	★	形態	留意点	資料・教具等
導入： 1 授業研究会の目的を確認し、授業観察の視点を共有する。 (10分)	⑰ ⑭	講義	○学習指導案で、児童の実態、本時目標（教科、日本語）を確認する。 ○授業観察の視点を確認する。 ・教員は、内容理解や学習参加のため、どのような支援（スキヤフオーリング）を行っているか。 ・児童は、授業のどのような場面でのような日本語を使って学習しているか。	・授業者が作成した「教科志向型JSLカリキュラム」学習指導案
展開： 2 日本語と教科の統	⑮	授業	○参観者は、次のような支援が見られた場面をメモし、授業後のセッション	記録用のビデオ、カメラ

<p>合学習の授業を参観し、日本語を学ぶ児童の具体的な姿や、学習支援のための具体的な方法に気づく。(45分)</p>		参観	<p>ンで紹介できるようにしておく。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・支援（スキヤフオールディング）の効果 <ul style="list-style-type: none"> －理解のための支援 －表現のための支援 －覚えやすくするための記憶支援 －自分で学べるようにするための自律支援 －意欲等を維持するための情意支援 ・具体的な方法 <ul style="list-style-type: none"> －フォーカス・オン・フォーム －リキャスト 	<p>ラ</p> <p>文科省「JSLカリキュラム」中学校編より「支援」に関する部分</p> <p>フォーカス・オン・フォームに関する資料（講師作成）</p>
<p>3 授業者の説明を聞く。(10分)</p>	⑭	講義	<ul style="list-style-type: none"> ○児童の実態に応じた目標設定 ○授業者が意図した支援 	<p>付箋紙、模造紙、マジック</p>
<p>4 日本語指導教室でできる支援とその効果について検討する。(40分)</p>	⑰	話し合い	<p>○観察した授業について話し合い、外国人児童生徒の学習参加上の困難と、それに対する教師の支援とその効果について検討する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ①観察した児童の姿をもとに日本語の目標設定の適否について検討する。 ②授業中の支援について気づいたことを、付箋に書いて発表し合う。 ③支援の効果を「理解・表現・記憶・自律・情意」等から考える。 ④日本語の目標設定、支援の効果と具体的方法について講師の話聞く。 	
<p>まとめ：</p> <p>5 日本語指導担当として工夫したいことを考える。(10分)</p> <p>※終了後アンケート記入</p>	⑮	話し合い	<p>○自身が担当している児童生徒に対して、授業中どのように支援を工夫したいかペアで話し合い、支援方法についてイメージをもつ。</p>	<p>アンケート用紙</p>

3. 実施者による振り返り

本事例は、日本語と教科の統合学習を指導することが期待される「日本語指導担当教員」を中心としたものである。このため、研修への期待も「統合学習」の考え方、指導の在り方、目標設定の在り方を学びたいとするものが多かった。参加者の満足度等を見ると、提案授業を参観し、目標設定や効果的な支援のあり方についてグループ協議を行うことが、参観者自身の指導の改善に有益だったと考える。

日本語指導教諭の採用によりようやく研修の積み重ねができる体制ができつつある。今後の研修については、「1. (3) 研修の課題」で述べた通り、年少者への指導経験が少ない担当者が多いという現状を踏まえ、まずは、児童生徒の日本語能力に応じた日本語指導や教科指導、児童生徒の文化的背景や家庭環境等を踏まえた生活指導、学級担任（教科担任）や日本語指導員等との指導内容に関するコーディネート等、担当者が日本語指導担当教員に求められる多様かつ専門的な役割を果たせるようになるための研修を行っていきたい。

4. 資料

(1) 使用/参照した資料一覧

- 1) 授業者が作成した「教科志向型 JSL カリキュラム」学習指導案
- 2) 文部科学省「JSL カリキュラム」に関する web ページ
小学校編 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/001/008.htm
中学校編の「支援」に関する部分
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/fieldfile/2015/10/06/1235804_002.pdf

(2) 配布資料（抜粋）

- 1) 授業者が作成した「教科志向型 JSL カリキュラム」学習指導案→資料①
- 2) 講師が作成した資料→資料②